

物質的想像力と現実世界——ロバート・ラウシェンバーグのカードボード・シリーズ

鈴木幸太 (慶應義塾大学)

本発表は、ロバート・ラウシェンバーグ (1925—2008) が、主に 1971 年から 1974 年の間に制作したカードボード・シリーズについて、その芸術としての意義を考察するものである。関連作品を含め約 90 点にのぼるカードボード・シリーズは、その分量においても作家の制作歴のなかで重要な作品群でありながら、これまでほとんど注目されてこなかった。本発表では、作品の物質的な素材そのものに即した「物質的想像力」の現れと捉えられるラウシェンバーグの創作活動において、カードボードという素材が有する独特な性格を指摘することによって、これらの作品群が「現実世界」と芸術作品とをつなぐ作家の重要な試みの一つであることを明らかにする。

カードボード・シリーズは、ラウシェンバーグが 1971 年にフロリダに移住すると同時に制作が始められている。これらの作品群は、彼の他の作品にみられるアッサンブラージュ的なあり方を示しながらも、それまでの「コンパイン」や「シルクスクリーン・ペインティング」などとは異なった作られ方をしている。このようなシリーズの制作が開始されたのが、膨大なイメージのコラージュによって、それまでのスタイルの集大成となった作品 *Currents* が制作された 1970 年の翌年であることは、これらが作家にとって新たな試みの始まりであったことを示唆している。

本発表では、まず、ラウシェンバーグがカードボード・シリーズの制作に至った背景を、当時の政治・社会ならびに芸術をめぐる状況を通じて明らかにする。次に、このような背景の上に成り立つ彼の制作法について、バシュラールの「物質的想像力」の議論を手がかりにして考察する。バシュラールによれば、人間の夢想は従来「形式」の喚起するものであると考えられてきたが、「物質」もまた形式と無関係なものではなく、両者の相互作用によって豊かなイメージが生みだされる。ラウシェンバーグの作品は、芸術作品における物質の役割、すなわち、われわれの精神を活性化させる、形や色に還元されない物質のエネルギーを中心に置いている。写真の切り抜きや、視覚的にインパクトの強い素材 (ベッド、ヤギ、標識など) を本来のコンテクストを無視して使用する彼の制作法は、広い意味での「物質的想像力」の現れであると考えられる。そのなかで、カードボード・シリーズは、その素材の特性 (平板でありながら構築的であるという表現上の可能性) によって、作家の根源的な関心である「作品に現実の世界を持ち込むこと」が、素材としては直接的に、意味・内容としては沈黙を通じて「否定的」もしくは「逆説的」に表現された実例となっている。その試みがどこまで理解され成功したかは議論の余地があるが、カードボード・シリーズは、物質的想像力を通じた現実世界と芸術作品との交錯を、これまでとは異なるかたちで捉えた新たな試みであったと言えよう。